

探検部の設立と活動の記録 —山行活動を中心に—

Founding of the Exploration Club and Subsequent Mountain Climbing Records

輪倉 一広・三谷 育郎

要旨

2024年6月に周南公立大学に学生サークル「探検部」が設立された。本稿は探検部設立の経緯および趣旨、また今日までの山行を中心とした活動実績をまとめたものである。

既存の学生探検団体の多くは、その永い歴史を背景に活動様式や運営体制が一定程度確立されている。一方で、本学探検部（以下、探検部と記す）は未経験者が集まった新設の学生団体であることから、活動内容や参加形態に柔軟性をもたせた運営を行っている。

山登りを軸としながらも、初心者が参加しやすい活動や、参加者の関心に応じた内容調整を行うことで、探検活動への参加のハードルを下げることを意識している点が本サークルの特徴である。

紙数の多くは、サークルの中心的な活動として実施した計5回の山行についてのそれぞれ紀行文形式での報告である。5回の山行とは、右田ヶ岳、三倉岳、三瓶山縦走、三鈷峰（大山）、比婆山連峰半縦走であり、いずれも日帰らないしは前泊日帰りのものであった。

キーワード：探検部、探検サークル、設立、周南公立大学、山行

はじめに

2024年6月、周南公立大学に「探検部」が設立された。本稿は探検部設立の経緯および趣旨、また今日までの山行を中心とした活動実績をまとめたものである。第1部を探検部の部長である三谷が執筆し、第2部を同部の顧問である輪倉が執筆した。本稿の執筆にあたっては、探検部に関わる複数の部員による活動記録（写真を含む）を参照した。

第1部 探検部設立の経緯と趣旨

本稿の執筆者の一人である三谷は、周南公立大学に在籍する学生であり、学部3年次に探検部の設立に関わり、その後も運営に携わってきた。現在に至るまで、顧問教員の指導・助言を受けながら活動を継続している。

探検部は、部活動のような競技性や固定的な活動体系を前提とするものではなく、自然環境を活用した探検的・野外体験的な活動を柔軟に行う学生サークルとして位置づけられる。主な活動は山登りを中心としつつ、釣りや野外生活技術、簡易なサバイバル体験など、参加者の関心や経験に応じて内容を調整してきた。以下、探検部の設立の経緯と趣旨について述べる。



写真1 5大学サバイバルキャンプ



写真2 広島大学探検部員による魚捌き講習

1. 設立にあたっての問題意識

探検部の設立にあたり、三谷が重視したのは単にアウトドア活動を行う場を新たに設けることではなく、大学という組織の中で継続性と意味をもつ活動として成立させることであった。

大学におけるサークル活動は、学生生活を豊かにする一方で、構成員の入れ替わりが激しく、一過性の活動として終わってしまう例も少なくない。とりわけ探検活動のように、一定の危険性を伴い、経験や技術の蓄積が不可欠な分野においては、「楽しかった」という感想のみで完結する活動では、次世代への継承が困難となる。

そのため、探検部の設立にあたっては、①リスクマネジメントの考え方、②組織としての方向性、③団体装備の購入・管理に関する合意形成、④危険を伴う活動において活用可能な人的・制度的資源、といった複数の課題を設立段階から検討すべき重要事項として認識していた。

これらの課題は、いずれも探検活動を一時的な試みではなく、大学に根付く継続的な活動として成立させるための条件に関わるものである。本探検部では、設立時点で完成された形を定めるのではなく、これらの課題に向き合いながら、活動を通じて方向性やルールを徐々に確立していく方針を取ることにした。

2. 設立の経緯

前章で示した課題を具体的に検討するため、探検部の設立にあたっては、まず初期メンバー（三谷、安達、重見、森木）による協議を重ねることから始めた。

まず三谷は設立に際し、安達、重見の二名に声をかけた。両名はいずれも周南公立大学福祉情報学部に所属し、社会福祉を専攻する学友である。日常的な会話の中で、以前からアウトドア活動や自然体験への関心を示す発言があり、探検活動に対する問題意識や価値観を共有できると考えたことが、声をかけた理由である。

設立準備段階では、上記4名を中心に、複数回にわたり議論と協議を行っ

た。議論の主な内容は、探検活動におけるリスクマネジメントの在り方、組織としての方向性、団体装備の購入や管理に関する合意形成の方法、さらに危険を伴う活動において大学内外のどのような資源を活用できるかといった点であった。

また、探検活動は個人の経験のみに依存することが難しい分野であることから、全国探検連盟（後述）への加入も設立当初から想定していた。他大学との交流を通じて、技術やノウハウ、安全意識を学ぶことができれば、活動の質と持続性を高めることができると考えたためである。

これらの議論を通じて、初期メンバーの間で共通して強く意識されていたのは、「ただ楽しかった」で終わる活動にしてはならないという点である。探検部を一過性の集まりではなく、大学の中に残る知識や技術を継承しつつ、構成員に応じて柔軟に挑戦できる団体として位置づけたいという認識が共有されていた。

設立当初のメンバーはいずれも探検活動への意欲は高かったものの、経験や知識は不十分であり、手探りの状態であった。そのような中で、支えとなったのが顧問の存在である。顧問は全国各地での登山経験を有し、豊富な実践経験をもっていた。勢いに頼りがちな初期メンバーに対し、安全面や計画面において具体的かつ現実的な助言を与えた。

こうした協議と支援を重ねる中で、探検部は試行錯誤を前提とした運営方針を固めていった。現在のサークル運営における安全意識や組織の方向性は、この設立期における議論と顧問の助言によって形づくられたものであり、それらが相まって現在の活動基盤を築いたといっても過言ではない。

3. 活動環境としての山口県・中国地方

探検部の活動背景を振り返るにあたり、本稿では自然環境を包括的に論じるのではなく、実際に登ることのできる山の存在に着目する。

山口県内には、登山対象として広く認知されている山が複数存在する。寂地山、十種ヶ峰、右田ヶ岳、文珠山などはその代表例であり、いずれも日帰りでの登山が可能であると同時に、地形や眺望に変化があり、初心者にとって探検

的活動のフィールドとして適している。

また、中国地方全体に視野を広げると、大山（鳥取県）、三瓶山（島根県）、恐羅漢山（広島県）、蒜山（岡山県）、那岐山（岡山県）などが全国的にも知られ、1,000 m強の山々でありながら味わい深い山が多数存在する地域であることが分かる。これらの山は無理なく計画・実施できる標高や難易度であり、登山初級者の活動環境としての条件に恵まれている。

4. 全国的な学生探検団体の動向と探検部の位置づけ

大学における学生の探検活動は、全国的にも一定の歴史と広がりをもつ。全国探検連盟では、私立大学・国公立大学を問わず、多様な大学の学生探検団体が加盟しており、大学の枠を超えた交流が行われている。

これらの学生探検団体は、永年の活動を通じて形成された文化や慣行を有しており、OB・OGとのつながりを含めた継続的なコミュニティとして機能している点に特徴がある。

探検部も全国探検連盟に所属しており、これまで広島大学探検部や九州大学探検部などと合同で活動を行った実績を有する。これらの交流は、安全管理や行動計画といった実践面において、多くの示唆を与えるものであった。

5. 既存の学生探検団体との比較および探検部の特徴

前述のように、既存の学生探検団体の多くは永い歴史を背景に活動様式や運営体制が一定程度確立されている。一方で、探検部はまったくの未経験者が集まった新設の学生団体であることから、活動内容や参加形態に柔軟性を持たせた運営を行ってきた。

山登りを軸としながらも、初心者が参加しやすい活動や、参加者の関心に応じた内容調整を行うことで、探検活動への参加のハードルを下げることを意識している点が、本サークルの特徴である。

6. 探検活動における安全管理・リスクマネジメント

探検活動は自然環境をフィールドとする以上、一定のリスクを伴う活動であ

る。そのため、探検部では、安全管理を活動運営の基盤として位置づけてきた。

具体的には、活動前に天候情報や登山ルート、所要時間に関する情報収集を行い、無理のない行動計画を立案している。また、参加者の経験や体力に差があることを前提とし、歩行速度や休憩頻度を調整するなどの配慮を行ってきた。

活動中においては、体調不良や天候悪化などの兆候が見られた場合には、計画の変更や撤退を含めた柔軟な判断を行うことを重視している。これらの判断は、個人に委ねるのではなく、参加者間での情報共有と合意形成を通じて行うことを原則としている。

このような安全管理の考え方は、他大学の学生探検団体との交流を通じて学んだ知見を参考にしつつ、探検部の実情に合わせて取り入れてきたものである。

第2部 山行の記録

探検部の発足および趣旨は前半の三谷の報告によるが、ここからは部の顧問として輪倉がかかわった山行活動の実際について報告したい。

創部約1年半の間に探検部独自の活動として都合5回の山行を実施した。その様子を写真を添えて紀行文形式で報告したい。5回の山行は右田ヶ岳、三倉岳、三瓶山縦走、三鉢峰（大山）、比婆山連峰半縦走であり、いずれも日帰りのものは前泊日帰りのものであった。なお、近隣の他大学との合同山行への参加もわずかにあったが本稿では割愛する。

1. 右田ヶ岳

右田ヶ岳（426m）は大学のある周南市から程近い防府市のほぼ中央に位置する岩峰の低山である。市街地から近く、登山口には登山者用の駐車場も整備されており、市民に人気の山である。

さて、この山行は探検部創部にあたってはほぼ部の発足に関わった者（三谷、安達、森木、重見、輪倉ほか1名）の思いを共有するために企画されたプレ山行であった。2024年5月25日（土）、五月晴れのもと車を右田小学校南側の登山者駐車場に置き、10分弱歩いて塚原登山口から登山道に入った。右田ヶ

岳の魅力は、何といっても低山ながら変化に富んだ登山道と岩峰さらに山頂からの防府市街をはじめ瀬戸の海を指呼の間に望める景観である。加えて言えば、天徳寺コースで通過する石船山下のコース脇に順に設けられた三十三観音（摩崖仏石窟）も興味深い。聞くとところによれば、右田ヶ岳には年間を通して日参する人がいて、5,000回とか7,000回の登頂歴をもつ強者もいるという。「朝飯前の一仕事」と日常生活の中でルーチン化しているらしい。

登路で用いた塚原コースの途中で直登ルートへの分岐がある。すぐ前を歩く男性2人組の常連登山者と話が弾み、直登ルートを案内してもらうことになった。高さ10mほどもあろうか、屹立した岩に張り付き体を天頂へと持ち上げるスリリングな体験である。70歳も後半の齢を重ねたベテラン・クライマーの手足運び指導で全員何とか登り切った。格別の達成感に心が躍った。



写真3



写真4



写真5



写真6

さわやかな好天に誘われてか、山頂には多くの登山愛好者が所狭しと群れ集っていた。私たちも山頂部の端の方に座を占め、三谷持参の調理器から作られたホットサンドに舌鼓を打った。毎日曜の朝には常連さんが山頂で登頂者にコーヒーをふるまう伝統があるらしい。いかにも地元の人々に愛され続けている低山らしく、山愛好者たちの気の置けない風習である。

帰路は天徳寺コースをとった。コース名のごとく、麓の天徳寺の境内に下る登山道である。下山はついつい気持ちが急くもので、じっくりと楽しんでとはならず足元も加速気味であった。登路と帰路が完全に重なるピストンにもそれなりの利点や魅力はあるが、コースを変えることでよりその山の多彩な姿を見ることができる。今回もまたそうした恩恵にあずかった。先述のような摩崖仏を眺めながらの下山路である。自然石に彫刻された石仏は何とも神秘的で興味をそそることこの上ない。

登山口の一つとなっている天徳寺の縁起には、文永11(1274)年7月18日のこと、大内氏20代当主・大内弘貞公が霊夢をみて右田ヶ岳山頂に登ったところ観音菩薩像に巡り合い、そこに観音堂を建て観音像を安置して周防国の守護仏としたのがそもそもの始まりであったと記されているらしい。その後、右田ヶ岳の「観音さま」は周防観音霊場の第25番札所となり、また観音堂も前岳の石船山へと移され、大正4年5月10日には天徳寺境内に丈六(1丈6尺)の観音菩薩像が勧進されたのを契機として件の摩崖仏の制作が行われるようになったそうである。寺住職第25代の永井大暁和尚の代に観音信仰をもつ信者たちが家門の繁栄と健康を祈って制作を進めたとされ、大正4年から同13年の足掛け10年間を費やして計33体の摩崖仏が製作されたという。

ともあれ、登り約1.5時間、下り約1時間ほど、頂上部での休憩を含め3.5時間ほどの山行を終え、途中、近くの長浜温泉で汗を流し無事帰路に就いた。

2. 三倉岳

三倉岳(702m)は広島県西部の大竹市にそびえる、上部に3つの岩峰を配するなかなか「カッコいい」山である。低山ながら、変化に富んだ登山路とスリリングな鎖場が魅力といえる。3峰は、向かって右から朝日岳、中岳、夕陽

岳である。何でも、「三倉」とは人生の三要素の福、徳、寿を象徴しているという。登山コースは途中からほぼ平行に走る A・B の 2 路があり、B で登って A で下るあるいはその逆の A で登って B で下る、いずれでも分岐点で接続され無理なく違ったコース取りが可能である。

この山はフリークライマーたちにとってはかなり有名で、中には関東からはるばるこの山を目当てに来る者もいる。我々が登った時にも浦和ナンバーの車から降りた 4、5 名のクライマーご一行が中腹の岩場を目指して登路を急いでいた。それなりの年配の方々であったが、若かりし頃から岩にとりつかれた旧知の仲間とのことであった。

実は、三倉岳の主峰は 3 つの峰の背後にあり、標高は当然ながらこれら 3 峰よりいくらか高い。ただ残念ながら、登山口となっている三倉岳県立自然公園の駐車場広場からそれを望むことはできない。輪倉が過去にこの峰を通った印象——比較的高度差のないアプローチからは独立した峰とは思えない——では、木々に四方が遮られて山頂を示す三角点や「廿日市 20 名山」と書かれた山名板がなければ気づかないほどまったく変哲のない地味な山頂である。

さて、われわれの山行計画であるが、参加者は三谷、黒木、宮崎、佐々木、前田、輪倉の 6 人であった。B コースで登り三倉岳の主峰には行かず前衛の 3 峰を踏破して最後の夕陽岳を下った鞍部から A コースで下り、A・B の分岐点を通って駐車場広場へともどる一般的なルートをとることにした。

当日の昨年 12 月 7 日は、島根県の三瓶山縦走を計画していたのを急遽変更しての実施となった。師走の山は時に冬型の気圧配置から送り出される寒気によって降雪が予想されることがある。今回も中国地方に強い寒気が張り出してくるとの予報を受け、実施の前々日に目的地を変更することになったのである。こうした変更の判断は山行ではちょくちょくある。実施日を変えるか、目的の山域を変えるか、とくに中国地方では東西に連なる中国山地を境にして日本海側と瀬戸内側では雨や雪の状況が大きく異なる。寒気の影響は受けても瀬戸内側の冬は日本海側とは打って変わって晴れて乾燥することが多い。

さて、一行は公用車のセレナに同乗して目的地の三倉岳県立自然公園の駐車場に着いた。まずまずの天候に気をよくして、早々に準備を整え登山口をス

タートした。しかし、三峰の上部は中国山地を越えて渡ってくる北風の影響を受け、さすがの寒風と風花に心が折れそうになった。身体の末端がかじかんで、身体の芯がかすかな悲鳴を上げていた。事前に防風・防寒対策を連絡・共有してはいたが、予想を超える寒さに気持ちが削がれた。

ともあれ、三つの峰の各頂からみえる四方の景色はまさに佳景、絶景であった。低山だけあり山肌には紅葉の名残もあでやかに興を添えていた。峰の頂をつくる巨大な岩の上には幾分日差しもあり気分は最高だが、小心者の集団ゆえか岩の端まで行って下方に大きく開かれた空間を覗こうという猛者は現れなかった。



写真7



写真8

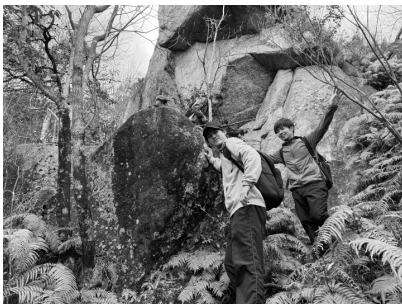


写真9



写真10

この山のハイライトの一つは中岳と夕陽岳への各とりつきにある鎖場だろう。どちらも20m近くの高さがあるか、狭い岩の谷合に設けられた鎖やロープ、また足場確保のために岩に埋め込まれた金属製のステップが頼りである。参加した女性陣にとっては、言葉とは裏腹に征服意欲をそそる大喜びの難所であった。それでも慎重を期し、先の者との間隔を取って通過した。

下山は道迷いかなと危惧する場面もあったが、無事に分岐点を越え登山口に帰った。登山口付近で鮮やかな紅葉真っ盛りの木々を愛で、記念写真を撮って帰路に就いた。途中、岩国の日帰り温泉で汗を流した。

3. 三瓶山縦走

三瓶山（最高峰1,126m）は大山隠岐国立公園の西方部分に位置し、活火山によってつくられた直径約5kmのカルデラと呼ばれるお椀を伏せたような形状の山である。男三瓶（1,126m）、女三瓶（957m）、大平山（854m）、孫三瓶（903m）、子三瓶（961m）の各峰を周囲に擁し、中央には火口跡がある。古くから大山とともに中国地方を代表する山として親しまれてきた。

先述のように、最初の企画では2024年の12月実施予定の山行であった。しかし結局、年を越して、それも年度初日の4月1日に実施する運びとなった。ただ、早春に時期をずらしたことはむしろ正解であった。山に芽吹き季節が到来して、生命が息づく様子を目の当たりにすることができたからである。山の魅力はこうした四季折々の変化の中に容易に見つけることができる。

今回の参加者は、三谷、前田、安達、佐々木、輪倉の男衆5人であった。探検部の山行としては初の遠征登山、金曜5限の授業を終えて前泊日帰りの道行きに就いた。宿泊は大田市内のゲストハウス、すぐにカプセルベッドに身を沈め早朝の出発に備えた。翌朝5時過ぎ、眠気の残る気だるい体に鞭打ってそそくさと身支度を整え6時過ぎに宿を出発、20分ほどの距離にある標高463mの三瓶山西ノ原駐車場に向かった。

好天に恵まれ出がけから高揚した気分で登山開始。年度初めの平日ということもありほかの登山者は見当たらず、貸し切り状況の中、一路最初の目標地点である男三瓶山頂を目指した。今回のコースは、西ノ原登山口を起点に男三瓶

山、兜山、女三瓶山、大平山、孫三瓶山、子三瓶山とカルデラの周囲を順に踏破する縦走コースである。標準タイムで約6時間、最高峰でも1,000mちょっとの低山とはいえ峰の数だけアップダウンが見込まれるまずまずの健脚コースである。

主峰である男三瓶山までの登りは高度差で650mほど、一行は先頭を歩く三谷の速いペースに乗せられて順調に高度を稼いだ。山の谷合に張りついた残雪を愛でつつの早春のさわやかなエクササイズである。三瓶山頂神社の祠とベンチのある男三瓶山頂に到着、眼下の大田市街から日本海まで広がる景色を堪能し、次の女三瓶山を目指した。男三瓶から女三瓶へ向かう下り道であったか、北斜面の登山道に残雪が膝の深さ程残っているところがあった。踏み抜かないよう皆注意して越えた。これもまた一興、早春ならではの場面である。

女三瓶山頂では少し早い昼飯を木製のデッキの上で思い思いにとった。私と佐々木以外は、三谷が持参したコンロで湯を沸かし、定番のカップ麺をすすった。「山頂で食うカップラーメンが一番旨いんだよな」のささやきにも似た声を聞いたような、聞かなかったような。

エネルギー補給を済ませ、意気揚々と先を目指した。大平山は、春から秋まで三瓶山東の原登山口駐車場から乗る観光リフトで上がることができる。頂上部には立派な展望テラスが設けられ、三瓶山が観光の山でもあることを思い起こさせてくれる。続いて、低く笹が茂る冬枯れの開放的な小道を抜け孫三瓶山へ向かう。途中、これから行く山々が指呼の間に見渡せる。孫三瓶の頂からの景色もこれまた絶景。そろそろ疲れも出始める中、愚痴一つ漏らさないところは探検部魂というものか。

最期のピークである子三瓶山は「子」とはいえ堂々たる山容である。頂上もまたこれまでの家族峰と同様、四方に開かれた佳景である。一行、来し方を振り返りつつ子三瓶をあとにし、登山口の西ノ原へと向かった。西ノ原に戻った一行は何とか強顔で写真に納まった。浅春の空気を腹いっぱい吸うことができたよき山行であった。帰りは中国地方随一の自噴量を誇る三瓶温泉で体の芯まで温まり、帰路の高速をひた走った。



写真 11



写真 12



写真 13



写真 14

4. 三鈷峰

三鈷峰（さんこほう、1,516m）は大山の稜線に連なる大山北壁をダイナミックに望める一峰である。ピークが密教法具「金剛杵」の三鈷に形が似ていることから名づけられたという。誰もが知る「大山」ではなく、あえて隣接するこの峰を探検部の山行に選んだ——こと山行については、勝手ながら目的の山域・コースを輪倉主導で決めさせてもらっている——のにはもちろん理由がある。それは大山の登山道が観光化され、まさに夏山登山道がそうであるように整備され過ぎの感が否めず、登山の醍醐味ともいえる野趣性が失われてしまっていると思われたからである。卑しくも「探検部」を標榜する活動団体にとって観光登山は似つかわしくない。

「大山」とも「伯耆富士」とも呼ばれるこの山は、かつて米子中学校の教諭

として勤務し、のちに日本紋章学の創始者といわれる沼田頼輔によれば、その開基が少なくとも養老時代の金蓮上人に遡るといふ。まずは修験道の山としての前史をもち、のちにこの僧により仏道の山として大山寺が開創されたことに始まるという。明治以前、大山の頂である弥山（みせん）に登ることは寺法で厳しく禁ぜられており、伯耆地方に伝わる歴史書にも「山上の沙汰厳密にして、他人更にこれを知ることなし」と記されるほど閉ざされた聖域であったため俗人の登頂はほぼ絶無であったと考えられている。

さて、探検部の三鈷峰登山であるが、2025年6月28日に決行された。参加者は佐々木、千代樵、黒木、森木、住田、富永、井上、柿脇、小谷、輪倉の総勢10名（男6、女4）である。前日5限の授業を終えて、一行公用車のハイエースに乗車していざ出発となった。前泊地の帝釈峡スコラ高原のログハウスに入ったのは21時半を回っていた。女子棟で巨大クモとの格闘事件などあったが紙幅の関係で詳細は記さない。翌朝、1時間ほどの距離を走って登山口となる南光河原駐車場に着いた。

まずは駐車場入り口にある登山届ボックスに今日の山行予定を書きポストイン、登山口までのアプローチである大山寺境内を群れつ離れつ和気あいあいと歩を進めた。その後の苦戦など誰ひとり我が事として知る由もなかった。実際、参加者のひとりにその「苦戦」が訪れたのであるが、本人の名誉のためこれ以上は記さない。

当初の予定コースは、大山寺境内から大神山神社、下宝珠越、中宝珠越、上宝珠越を経て三鈷峰の頂を踏み、さらに象ヶ鼻にも立ち寄って同経路を下山するものであった。コースタイムは5時間半、標高差約750m、まずまずの行程である。幸い天気は上々、ただ初夏の蒸し暑さが植物の精気とは裏腹にジワッと体にまとわりつく。

あまり視界の利かない樹間の登路をひた上り、ようやく中宝珠越の手前で大山の雄姿が現れた。アルペン・ムードたっぷりのその容姿に思わず歓喜の声を上げそうになった。山頂部の崩落が進み、だいぶ前から最高点である弥山への立ち入りは禁止されている。そして、その左には三鈷峰もその姿を現した。実は、中宝珠越のかなり手前から隊は2分され、先を行く6人と後続の4人との

距離はだんだんと広がっていたのである。

ともあれ上宝珠越を通過し、灌木が左右から登路を遮るなか何とか後続隊が三鈷峰と象ヶ鼻の分岐に出るころには先行隊はとっくにユートピア避難小屋に着いていた。参加した1年生全員がこの先行隊メンバーであったことは探検部の将来にとって心強い。分岐となる鞍部から三鈷峰まではもう一息、後続隊の面々にも暗闇に一条の光が差す如くに「希望」が見えてきた。しかし、容赦ない日差しが降り注ぐ、もう日陰はない。あえぎつつ三鈷峰山頂を踏んだ。

「あれ、先行隊がないぞ」。それもそのはず、彼らはこの峰と反対側の避難小屋で我々の到着を待っていたのである。早速彼らに連絡を取り、「ただちに三鈷峰に集合」と伝えた。つまり、予定していた象ヶ鼻は諦めることにしたのである。先行隊が我々と合流するにはさほどの時間を要しなかった。頂上で



写真 15



写真 16



写真 17



写真 18

集合写真を撮り、めいめい持参した昼飯をほおぼった。三谷が佐々木に託して担いできたコンロで湯を沸かし、カップ麺で腹を満たす者もいた。なぜか、シャボン玉に興じるメンバーもいた。それにしても、大山北壁のダイナミックな山容には皆一様に魅了された。

下山は萎える足を騙しつつか労わりつつか、幾分言葉少なに登路を戻った。トイレのある大神山神社へ着くころには疲れも最高潮に達した。それでも、道中の無事を謝して一同が横並びに拝殿に向かい拝礼したその謙虚な行為は特筆に値するであろう。その後、大山寺の参道沿いにある豪円湯院で塩を吹いた汗を流し、帰路に就いた。車中には爆睡の寝息（いびき）が鳴りやまなかった。

5. 比婆山連峰

比婆山連峰（最高峰 1,299m）は比婆道後帝釈国定公園に属する、広島県と鳥根県の県境に位置する神話に彩られた山である。伊良谷山、毛無山、烏帽子山、比婆山、立烏帽子山、竜王山などの 1,200 m級の山々が馬蹄形に連なっている。古事記には「其の神避りましし伊邪那美神は、出雲国と伯伎国との境の比婆之山に葬りき」との記述があり、比婆山（御陵）の山頂にある久米神社（奥宮）には国生みの神であるこの伊邪那美神が祀られている。

2025年11月22日（土）、今回の山行では、連山のほぼ南半分をなす烏帽子山（1,225m）、比婆山（1,264 m）、立烏帽子山（1,299m）の峰々を歩いてきた。所要時間は約5時間半、ひろしま県民の森登山口を起終点に、まず出雲峠へ向かい、そこから反時計回りに烏帽子山、比婆山、越原越、立烏帽子山と進んで展望園地を経て登山口へ戻る快適な山歩きであった。それもそのはずで、とにかく登山道がよく整備され難路や危険箇所はどこを探しても見つからない。また起終点となる「ひろしま県民の森公園」へは連峰のどこからでもエスケープルートが確保できる安心な山である。それゆえ健脚ぞろいの探検部の面々には物足りない感もあったが、冬枯れのブナ林の小径やとりわけ立烏帽子山の頂から望む開放的な景色はそれらを十分に相殺する素晴らしいものであった。

週末ではあったが師走ともなると人出も少なく、比婆山山頂で4人ほどの登

山者に会ったきり静かな山歩きとなった。一部の登山道脇には前週に降った雪が解けずに残るこの時期ならではの秋冬共存の様相に軽い感動をさえ覚えた。それにしても女子部員の参加は地味な山行に花を添えてくれる。今回は三谷、佐々木、竹下、本田、井上、小谷、柿脇、輪倉の8人（男5、女3）が参加した。佐々木はこの5回の山行のうち4回の参加で、往復の運転役を兼ねる輪倉を除けば最多の記録を誇った。



写真 19



写真 20



写真 21



写真 22

この山行では登山より前泊した宿に記すべきことがあったと言えるのかもしれない。なぜなら、帝釈峡スコラ高原のコテージがなかなかの快適さで、後泊も望むほど予想外に充実していたからである。10人用で27,000円の料金は8人利用でもかなりのお得感があった。前回の大山山行で利用した5人用ログハ

ウスが値段相応であったのと比べると、こちらは風呂、10人用テーブル、テレビ、調理器具一式、2つのウォッシュレット付きトイレが揃い、8畳の和室が2部屋設けられている。十分すぎるほど充実した設備である。三谷が「国家試験の直前対策で合宿したらいい」と半ば期待を寄せたのもうなずけるところである。

寄る年波には勝てず先に床に就いた輪倉を除いて、メンバーたちは深夜までカードゲームなどに興じたようである。それでも明朝6時過ぎには皆起床し、とくに1年生の5人は朝霧がかかった高原の散策を楽しんだらしい。氷点下にも迫るきりとした外の冷気に老兵は完全に気持ちを削がれたが、10代の若人にはむしろ心地よい刺激となって血が騒いだのであろう。

ともあれ、参加メンバーの18時からのバイトに間に合わすべく、今回はわずかながら体にまとった汗をそのまま持ち帰る少々慌ただしい帰路となった。

おわりに

大学の探検部（探検サークル）の活動フィールドは山登りに限ったものではない。沢、洞窟、川、湖、森林、海、島、砂漠、雪原、氷瀑などいたるところに好適なフィールドが見いだされる。それはちょうど大学生の年代にある青年たちが潜在的にもつ未知への興味、大自然への憧憬、あるいは物質文明への抗い、そういった諸々の抑えがたい感情を受け入れる器がまさにこの探検部であったと言えるのではないか。その証拠（傍証）に、昨春の部員募集を経て運用されている探検部のライングループには51名もの学生メンバーが登録されている。

そもそも、日本で初めて学生団体としての探検部が誕生したのが京都大学であることは意外と知られていない。1955年に創部され、60年の歴史をもつという。しかし、「棲み分け理論」に代表される生態学者・今西錦司氏がかつて京都大学探検部の前身である京都帝国大学旅行部に籍を置き、それ以降、後身となる探検部を含めて、国内外の未踏ルート・未踏峰を目指したことはそこそこ知られている。

では、周南公立大学探検部は今後どのような方向に進んで行くのか。京都帝国大学旅行部がその後「登山派」と「探検派」に分かれ、それぞれ山岳部と探検部へと発展していったように、探検部にも近いうちにそういった議論が湧いてくるのかもしれない。否、もしかして永い伝統をもつ地元の山口大学洞窟研究会のような非常にマイナーな領域へと動いていく可能性も否定できない。ともあれ、探検部の創設に関わった者としてその行く末を見守っていきたい。